

## 「私の使命」

沖縄県立小禄高等学校三年 城間 優花

「沖縄戦を語り継ぐ」

そう決心して八年が経つ。小学四年生の時の平和学習が終わった後、廊下でふと思った。何かに突き動かされるように。

私が沖縄戦について初めて知ったのは、幼稚園生の頃だ。祖父に連れられて行った平和祈念公園。資料館で見た「不発弾」その時初めて「沖縄はずっと平和だったわけではない」ことを知った。とてもとても大きな衝撃だった。それからだ。私が毎日沖縄戦について触れるようになったのは。気がつけば手に取って読んでいた沖縄戦の本。本を開くたびにたくさんの「沖縄戦の記憶」に触れる。「怒り」「悲しみ」「苦しみ」そのすべてに触れるたびにどうすることもできない苦しさややり場のない怒りをおぼえた。

「戦争さえなければ」

そんな思いを抱えながら、読み続けた。

毎日沖縄戦に触れていた私。そんな私にとってとても考えさせられる時期がある。それは六月だ。沖縄の学校では、平和学習をする時期。普段は、みんな沖縄戦についてどう思っているのかわからないけれど、この時期は知ることができる。でも、毎回感じるのどこか「他人事」のように思っているのではないかということだった。それを感じるとき、とても悲しくなる。沖縄戦のことだけでなく、終戦記念日である八月十五日を知らない人、広島に原子爆弾が落とされた八月六日、長崎に原子爆弾が落とされた八月九日知らない人や曖昧な人。戦争を知らない世代の私達でもしっかりわかっていておかなくてはならないことをこんなにも「知らない人」がいる。

平和学習をしていて感じる「やらされている感」

その人達に、そのことに私はどう向き合うべきか悩んだ。

そんな時、ある出会いがきっかけでその道筋が切り開かれた。

中学一年生の職場体験。ひめゆり平和祈念資料館のみなさんとの出会いだ。あの二日間で私がこれからやらなければならぬことをみつけた。

とても印象に残っているのは、元ひめゆり学徒隊である証言員さんの話に大勢の人達が真剣に耳を傾ける様子。その様子を近くで見ている私は「自分も多くの人を惹きつける語り部になる」と決心した。そして、「戦争を知らない世代」である学芸員さんや説明員さんが「ひめゆりの記憶」を一生懸命引き継いでいる姿を見て、私も「戦争を知らない世代」として沖縄戦の記憶をたくさんの人に継承する一員になる決意を固めた。

そして、もう一つ印象に残っていることがある。職場体験中は、戦争体験も聞いたけれど「自分はテニス部で球拾いしてたよ」「ここにはバレーコートがあった」という戦争前の話を聞いた時、自分が何を伝えていくべきかわかった。とても大事なことに気付かされた。

「沖縄戦」が始まる前は、私達と同じように友達や先生、家族と楽しく笑って過ごしていたのだ。今、スマートフォンで友達と写真を撮るように、友達と写真館で写真を撮ったり、学校行事で誰が一番カッコイイか一番カワイイかを決める「ミス・ミスター」があるように寮の部屋ごとに決める「美人投票」があったのだ。時代ややり方は違うけど、今の私達と変わらない無邪気な青春を送っていたのだ。

そこを一番に伝えなければならぬ。「沖縄戦」を昔の話で終わらせないために、もっと「戦争を知らない世代」に身近にリアルに感じてもらうには。そしてそれが、「知らない人」「やらされている感」に私がどう向き合うかの答えだ。

高校三年生になった今、ある大きな目標を掲げることにした。  
「将来は、学芸員になって沖縄戦を語り継ぐ。沖縄県内や日本国内だけでなく、世界中に沖縄戦を発信する。戦争のない世の中を創るための道を自分が切り開いていく。それが自分が人生においてやるべき使命だ」

この目標は、簡単に達成できる目標ではないと思う。けれど、これは何かに導かれるように沖縄戦に関心を持った自分がやらなければならないことだと感じる。

七十六年前、戦火の中に倒れていった人達。激しい戦火をくぐり抜けてきた人達。心に深い深い傷を負いながらも前を向いて生きてきた人達。戦争体験を口にするのができず苦しんできた人達。重い口を開いて、私達に「沖縄戦の記憶」を繋いでくれた人達。「戦争を知らない世代」だけど必死に記憶を継承しようとする人達。その人達の「思い」で今の生活がある。それを忘れずに、バトンを繋ぐことこそ、「戦争を知らない世代」である私達の使命だ。